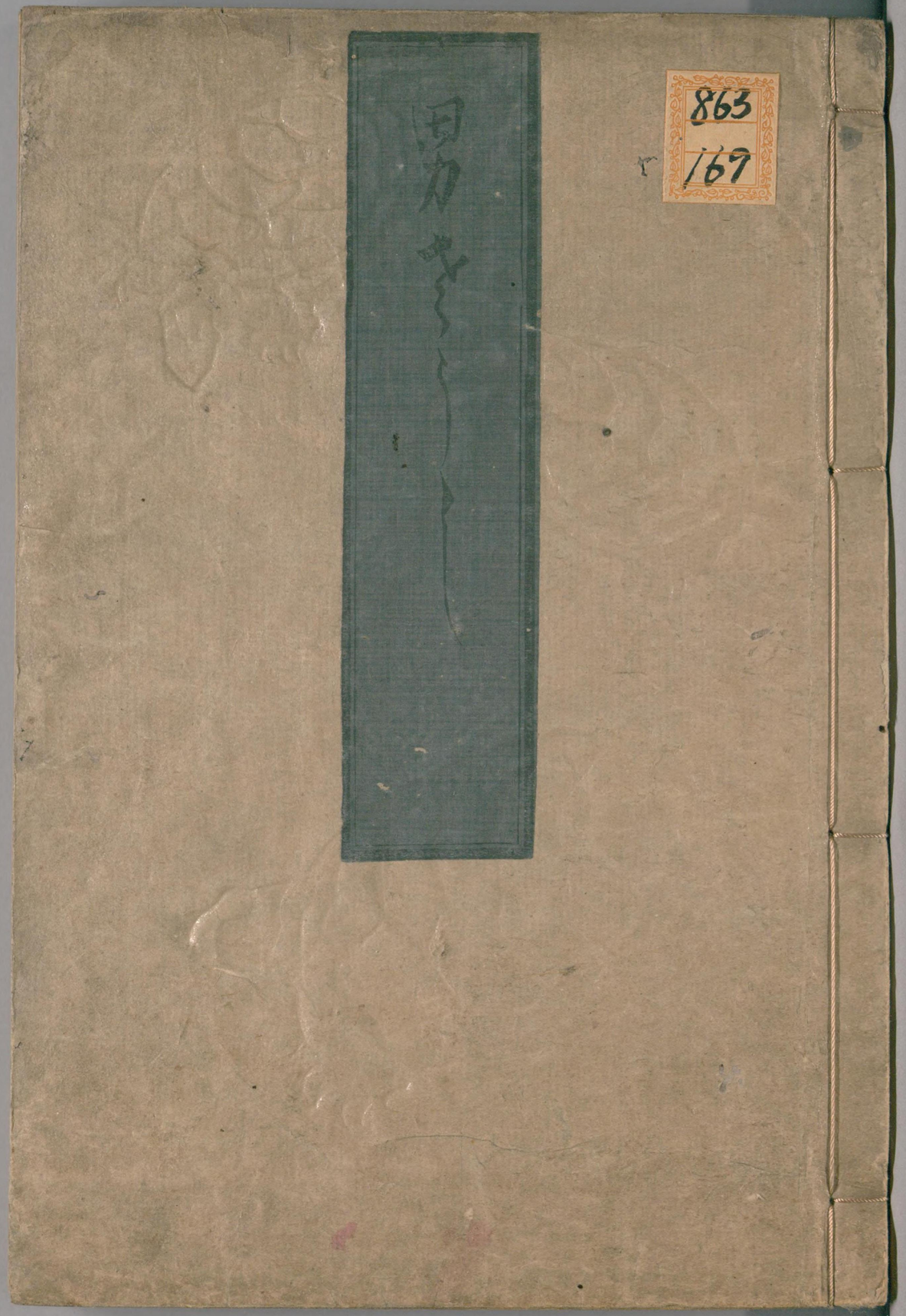
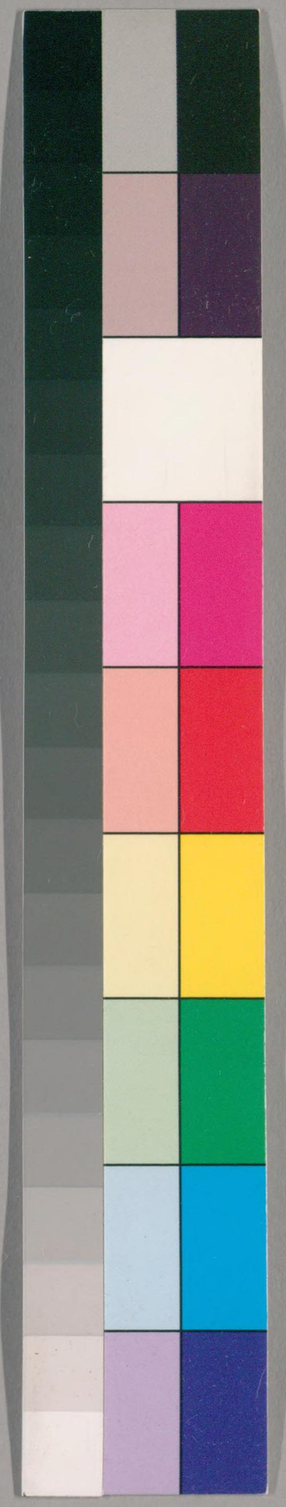


863
169



国立国会図書館　　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169

ガラス使用

八六三—一六九

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

人知通じ弘む通ふ
よふなものや家よ信濃の仁九
うし東北ゟ花七ト云事ゟ従安
文ゟ心こゝろ〳〵正風ゟ教ゆるりこゝろ
仰ゟ〳〵ちつゟこゝろゟ日ゟおむ七
拙句ゟ〳〵す乃ゟ春焼のほゝゟ
ゟ雪ゟ芽ゟ水ゟ心ゟ

男草紙の序

柳月院の老ぬ北巷なる事いふも
かしおさ雲の上より郢の田舎の行脚
ふ音ひさ新い久ふのの月の桂此男草紙
世に伝へてあやはもちたた栄ふの代も
いやさかな栄えさかへん事ぬほさ伝て
老の端たかい身まで

貞徳八世孫 俳学 毛莱園金子頑誌

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

俳諧男中紙 三篇

月花堂 眞あるじ 花尺房 うづ
一日の旅よし雪のはるさめ

初雪和尚の滿四もおのつから
約さけて帰さるる方ぞ遠き日の

月院社著

三川 深月
下ヶ 素舟
秩父 梅寺
八戸 子麦
小越 石菜

お法なしよ汐みちくる夜の雨　京　蒼虬

荒馬よ雪をすれすれを郭公　信ノ　翠雨

名月や須弥の四列は散そろ　八戸　嬰渓

水ぬ人汝江にのあたまよう　〃　妻

鳴蝉よ松のうけを忍ひくる　〃　谷神

涼風やきくつく星の揃うう　〃　文汀

歌人も居るのう名水を

知るといい

足ぬるよ此一ふしの明の沈

抱儀

着ふくれ筆よかくる袋もなよ　下ナ　可門

初拾ひめて海の砂うちる　〃　雨潮

廻板よ夜寒くくく独くく　〃　湖鴎

きのふくく二年三昨日共花　〃　残雪

水よる日の影うう孕　〃　凡量

杜宇帰や里田の赤掃除　〃　孤松

立さうよしてる屋敷の小田の房　信ノ　南山

照る山を抱てきき時雨川　〃　斗石

柿の花落くうつや隅田川　〃　魯川

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

是幸の山家より出来りしの月
涼しさもたまれと養ふそもつ

狭布山

りんの雨思ひさけさる山の寺　　永ノ　其成
吟座や屠や秋を笑あつめ　　カタミ　維啄
雲雀なけ家も名もあら妹ら石　　泰蘭
抽の花白きも月の宿りかな　　ナリタ　青芝
一日も更ふなけれ三ッのとの夜　　深月
谷川の音ら眺いと百合の花　　古人　林風　泰迪

おくらや雲ちき月き月の雫
星の井の苔湧るや　めくみ　　七十四才　多賀女　於谷
奥そし人のもえぬる月の雪　　孤松
筑紫私陵奥私をすみ心　　信濃府　泰蘭
水ちるの二ッなれも　湧ちるく　　菊和
淋しくの夜ふまくく木人形　　秋田　ホノ　房　風也
ちや旅の疲ちる西ちる清ちる水　　笑風
親ちしき人をちしく編ちる
盆ちぬ墓も秋来て野菊心
子亮

十六夜もはや月なき空の雨
秋の日と忘れても長き夜の
夜の雁夜の吹あれ寒もせん　秋田　渭南　春之　ネノ乙亥

大江戸の秋

お代しを待もうやく君ら秋　信西ノ子　素菌
やさうさな畑をし雲の峯　ノ左
奥にやや雨気さくる見し蓼
短夜の袖よひくもり　樽　大坂　仲勝　八戸　鸞渭

やつれ生涯のひもつよう
おしく例るぬおのあり
年こそ悲哉を起して
日は初きまつりける諫
及くくくくつすこや
自在の男と放ぬること
雲定の江林の利をそと世
うくくて方を他を先ひ一
指て聊実諫のあるよなる
事なくて徹の秋を迎へ

仕氏舞信　風山

新しき柱よこすお祖乞ふ　渭橋
入相や船よかるほどきく、　八壺
岩の座何ゟ〳〵て水取くく、　春長
森のこゑ〳〵て杵やぬ旅の夏、　可負
松杉も神代のそのゝ秋ぶく吹、　渭負
祖花や里ゟ〳〵雨よるる、　菊二
ぬ月や雨のはるゟのの紙、　亀巣
のうや舟三井の夕暮　清秀、
居すまべを人を乱すよ卯月中、　兎月
　　森光

いろ〳〵よ夜を春すなよ帰水鶏、　東李
文月や草なつかしき色ふくむ、　翠雨女

越後親ちくまにて　上ケタカワ　鷺白

磐むろよのさ井込やまあらし
令ゐのま世上の菜よ寿る年も　秋田　珀賀
夕照よほまね乳の膨脹ゆく、　找喜
訪るの春〳〵よう云くく雨の降、　魚十
夏そ人よらせて花のの月、　四松
春〳〵この春て寒よ入るや五大カ、　良松

国立国会図書館　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169
ガラス使用

きぬ小家ら　　泰淀　楚在
名月や人を五十の秋つゝ　　大河仁　亭牛
七種のおもしたし茨の葉　　以輪保
花よる生れ付るる果敢の角　　以左見
山風よ吹れてもし蚊屋の裾　　舟圃　以左波
思ふ〳〵もそうする机の夜の月　　永　素童
私の消てもよろよろ新酒　　應壱
立なふ〳〵草も思ふ〳〵萩の花　越ノ　吉連
久くれの六ふ〳〵る尾花〳〵　　公石


章魚よ鮹よ汝出筆よ書すべきさ
くてをこそ汝よ宝寛こそ汝と倶よ
おまれひをおゝ
あつるを汝もおれ一筒の大天窓
らくも芋畑よ通よの痺あて
名を汚んやをゝ姐板の上よ一
せめてを楊妻の姓名を
面見す鳴呼おの
示さを汝印ておの
鮹の郎のすそくて

四ツ辻や　月おぼろなる　梅の花　土芳伝　路丈

山伏の　石なよすや　梅の花　亜井

山ふりを　己れを梅の　白さかな　全

老屋ーそち　死よおお山ぶきや　松牛　水

馬士の　ろよりくらく　梅の花　全

蜂くれ初めぬ日もなき　麓かな　了

くりくりとなお老僧の　房の人　山風

つくまでも　心うつれぬ　梅の花　孔

多代桑やなふなき　猿の声　箕

再発より日和の欲さなくの　ろう　ニナノ



屠令の初ほよくらぬ　ほもなし

喜柳北風をおくれを三日の月

明るきの心はなまる枯れこの

年北疾のりまや不二の山

尾花枯水れ人のなつうき

折のけてまふ泳むやうめは

関そ松よゆつそ柳の月疾

雨の日を正月こつ小村

不老の泥そて

竜芽や流ふそりその新

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

和らかな風よりそふ 榊 む

荒馬のよな余りたる 春こそ

霞よなれを雨もめてたし 佛の座

何心なくてらけしを 梅ぬ 格

雪やなしこの松〔まつ〕 立

冬籠敏の水も 招さんせむ

若草のけ色よも由突吾まな

春よ来て 麗き気々なの 立

茶の腹の赤分ぬもう 春

在府 藤 有

横山丁 霧 暁

南 井

丹後 万 籟

竹 妓

大坂 若 眺

ヤキ 篤 老

下川 浦 安

諮 美

さま略す

ぼうけて 人れを花あり 涼し

風も一本秋の 野中この 形

秋風の 形を吹あり 松の

心なく鯉 年の 流をの 立

まよ 庵る 花のぬくう 立

大石 戸 師 老々雪も地よ 仕

去 京 伯

うたゝまも 春よも 水二々 松 立

花元

大洋 吉 推

信濃府 野 人 應 壱

大坂 希 杖 人 守 杨

京 蘭

六 舎

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

建渡うめ九も面白し萩の名
焼〳〵て世よもさわくや年木樵　秩父　嶺松
雪や谷の森戸の音、、、　妻　梢吾
一人旅こち〳〵向ても秋の山、、、　元隊
明の鴈よ一隅こそよ多小月、、、　桂子　嵐雪
おもふまも松よもそ〳〵人の月、、、　樗景　素堂
きつゝやうよ私ふや お出の後　卿
俤不のふも年ごと寒人称　素堂
牛の脊よ人そり安の小流ぶ　孤松



味の就ろ花を乾く硯こ
福寿や面白き秩の更ろ
雪三月のなひ降ろ下九十九
花ちまろ響ろといへ
原の生も鳴ろと涼む川辺ぶ、
香久山よ元有すゐや花和本、
枯芦の笹よもあ〳〵秋のくれ、
夾の風牛よも時を少つぶ
寄せをろの吟打素秩ぶ　信ノ

山寧
一鶴
砕石
桃丘
竹水
枕旭
枕井
蝸亭　信在有
越中

月と雨翌日後も有なん
木ぶかく住し杉 森のおく後 大山 士徳
 湖水 大坂 若助
不二の影うつしてえうや旅扇 越ノ
砂よその書て捨られを蜑のくち 小倉三坂 好古
もろ〳〵と傘をならべくや 柿花 二本松 雨汀
坊ら柿干しむきよ 峡より 中介
時雨や馬追ちる雪の礎 仙大 孤林
淋しさを松よおせて枯芝近し 湖風

分別のなを失ふ花野哉 那須 眉山
大行よ岩ほのけうる南 行脚 雨六
霄園を出ぬけて稈の戦さぐ 丹波 湧瀧
雪や水を渇〳〵老を 澤
灯ともそよの中ちう遠 馬村
千くよ招思ふ君山の 信ノ 子亮
ち帰てさめうる夢や 下サ 敷翁
衾ある小ち紙つや 越ノ 石坡
陣や雪傘打きまる 天丁

照る月もくさけむ秋の浦 京 世南

青柳よ引張の蒸素 初ノ古水

雪や旅しらず愛の笑 武全ノ糸 丁一

緑舎大佛

世よ霞〳〵谷七郷乃 苑の王

汝ありく家や疾き此 ようノ梅守

琴の音を柳もちる小家ノ子表

墨ちるて

水や素る素筑波の根ちりて 抱儀

帝季ののけ遅ふき夕日かな 信上田 桐泉

菅原根のちを合もなし玉兎 雅年

牛の声ゝ注や汗をの月の影 罕

笹啼や火桶の落ち秋のすゝ 分

時ろの雨ときよせる庭ぶく 馬幻

まゝろぬ夢の眠さくや乱 五

宇宙を筏のかなたや初時雨 東中丁 巴翠

風そろ〳〵傾の家ホ川うら安

里人や時雨ふるまも杉ぶく、 如亭

越安きもの大車於年の関 信仮山 月麿

麦蒔てうれそ小麦の芽ぐむ　　名田伏　水桁

牧の駒雨を通て揚ひらく　　愛水

我よのく年のある比重の酒　　佐佐ノ　桃園

庵を忘て心の花の情炉かな　　号渓

春の宵小梅よそ小麦の能又曙　　士ノ

感唫十点之部

売うねえ人も又へぬや柘榴花　　亭山

新雨を含める柳の眺哉　　育山

貴ておるのご庵や柘榴　　双魚

里人の踏そあるあ系小径　　信神山　山月

十月や二度めの雨を秋ようの　　湖風

陽あそよえかうれたる珍火の哉　　抱儀

月もなけ焼捨山乃ほとぎす　　詩菓　眉山

暫らく秋代の春や　銀河　　士先

夜日肥国の玉川よて

好そりくもよ名るよ花や岩のつけ　　八戸　文河

杜秋を分て涼うう春の雪　　上ノ　献歳

松おせ宿の妻せし雲よ多　　宇橋

牙のおろう柳そ見てもよて亀　　紅碩

遠山をめぐりて祝しよて寅　　佐ノ　子寅

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

瓜実よや袂よ二ツ　雪雄

大系や枯木よ浮る山の月　八戸　馬村

金塗よ笠て這入や初しぐれ　子将

雪の棲よも常一在所の郭　松琴

夷風の毛そろり敷の中　一隻

つくろはぬ月代よそく梅花　抱芦女

南天の花踏よりかくれ里　大坂　桐栖

行燈を引せて寄や妻の雨　泗水

青そろ放すまたろ花屑　奥　松青

稲孫植や鶏の脛よも花きく称　丁保号

浦山の年のつまりや屑さわく　下カなる　牛乳

松の木も年よる売や保古ろ、　囲美

入梅の清水よたくてゆるよりく秩父　梅守

七部大統の車かしを祝して

新まそもろこて浮や添足竹　未書林　有圃

一日の遅足へてう　蝸牛　省之

我年も売ろ花の青森ぐチラ　嶺松

鰭の日よ売すの郭や雲の峯　未ノ　杜夢

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

朝日のけ牡丹よ去ん中ハな迚　信ノ　蓑齢
ゑくのけものや夜明の青き挟　京ノ　布雲

袁安洛雪

埴土にて人のくれたる雪の庵　素菌
雪を雪へて雪の余情を見ん　以寧
山暮て庵の音和し美濃月　深月
明はのや仕友ふしき花車　ま代女
秋もや採礼を月の奥原ー　サヌキ　宗徳
儀のくとなるく掃や夾の雪　信ノ　子寅

春酒をこゝろ〳〵計の為この那　子亮
秋風の景白波となりよりう　ナリタ　芝
新森する労の杜さよ花の比　林風
志賀人越の神よりうや花の雪　八十峠
土ちふてもるまもと人〳〵五月雨　信ノ　秀中
茶雲夜風帰けて不二のそ　古人　晩
七夜不と松の伽してほとぎす次　古人　素迪
生れなのくゑゑぬれくる佛ぶ　古人　長湖
押乃され〳〵咲椿この那　秀ノ　笑風

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

水仙や旭御の昇る庭柱　翠羽
枯ふする牡丹よ焚き西日かな　如猿
冰滝を能勢松尾小夏ゝ　赤漳
ふる寺や岩よ隈ゝ破訓松　糸柳
三井寺をまれに今宵時雨ゝ　如海
十三里ぬれも昨の人名その月　孤松
ふるむけく我　当高よみその月　旅雁
心すむや光おいよと思ふ青　都仁
孫のかけ狩徐ろよ移ろう　真友

寒ゝ不二よ向ふよ残ろまろ　真玉
只涼ーすゝき松よ流のたと　上ヶ太田　里境
我門も名物よあよせ傍ゝ屋　賢美
暮よふる年風向ー吾松　可負
高柳の祇ゝのすゝ幸下の那　幽峰
名月や今宵の空ゝ人のそゝ　大坂　井眉
楽風をかき集めふる松柔ふ　坎寧
あちさゐやちらゝ拘なゝ屋ゝよ　大阪　千鶴
白蓮の浮世捨てゝ咲よりり　水戸　湖隣

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

山橋枝折れを月よ元越　其月
時雨や虫のくひ入旅の枕　李朗
添しさや草をこけるの澤べ　文来
乾なし沈をもないよ春の翁　丁保
稲活ざよ思ひよろろれ戸ぶ　綿之
古里とやてもる時雨ぶ　寸風
潮や霧れて匂ふ雲の雲　南溟
山着よ夕日抱て鶯さよ　翠雨
麦踏んたまし見るこの花ぶ　魯石

雨小やまを霧れをふり月　翠雨
初秋と思ひしもたく津の李　旅風
井も家の宝といよや萩の垣　重頃
落しそうな移む風　芳菜
多影やそうそうそう家斗り　先紅
秋添し夜まのをさ〳〵灯よ　幽山
落ろろ萩を花ろね芒の穂　学侯
秋風やいよしろろ松のい　十六ノ
汐風やむろ白ろ毎浦の社　玉鱗
水さへも松り秋と於ふり　桂洛

為る一妻の七枝乞めすれむ　紀外
をしくても余る今月よ萩の新　應壱
年のるよ猪のやまゐ秋屋ふ　李朗
七夕の別れ業てや小雨ふる　ろ水
ふるを汲よ消えて明のたつ　盤雨
淋しさを雨もこさへむそはの花　蒼水
杜風を寒き一ろ秋ろ風　貞女
四月ぐろ肌有めろ一秋袷　歌水
葬の食物をしいうゆうろ
月城の林もおたま〳〵夕
桐

この條面



ふるのしても萩のとろ　房カ弘　花郷
蘭の香をおてまろ風のろろ　文柳
名月や魚市ろ響ろ千曲川　信永仁　長竜
蜂の森ろろろろろ新の秀　專誇
あろろろろろ秋のろ　水竜
罠の嵐取近しろる秋をぶ　杖八王　杭酔
名月伝達の里よ秋や　北子
世を釣ろろ思ひろ長ふろ　帰耕
秋も淋しろ萩のろ　三
まりしく奥蓋ろ秀ろ　五

秋風のそよぐを寿よりく次ノ
侍らせ札よ痴ぬ酔なれそ奏文
吟る鏡たくれそ秋の雪き
駒まや又ふ牧のそく
灰もすゝ蘭のそや秋のあへ
十六夜や十月ふ新ふる新ふかり
よよ忘れそ新ふ寄なる
秋風の書もくてすく
角のおのそや牧おく聴
人の月の上を思ふぬ月

篠トラノ門　孤雲
なかれ在　秦文
武トッカ　玄龍
下サ蘆芽　柳哉
山壽
敲窮
テ
三ツ
雲外
華雨

水勢ひよ吹雪渡かつ壮川の
むつまじき地の陽や菊の花
引うの脱たゆまぬる一条ふ
水山をふそふすてる枯野ふ
臓疾よにすく尽き清水ふ
三日月のまそうをみや秋の風
我妻をえしてりや陽る屋立川
玉森の都を生れそ狩小
硯洗ふ器ようや水雲ふ紙八戸

策陌
李渓
敲窮
宇全
士先
天丁
鳳路
松杜
右溟

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

雪の朝や遥々尋ぬ初志を後　丹波野楊
服ふさけた耳の暖なり秋の雪　育山
腰のけるに石ふれをすゝれの雨　山石
いつくとも秋をあらそふ流れ哉　下サ敏鶏
牙さきそろふもの皆秋を走る秩父　信夫代宇全
めし花芒の雪もかれよ斗哉　下サ春雄
さまざま高蒲も多く咲く時　作秀如槌
撫うしや垂るる柳ふた、古人　虚舟
蜜蜂の飛身う軒よ時雨うつ　修ノス眉山

笑風
奇表　大坂
清客　下サ
子亮　那八戸
馬村
育山
敏雛　下サ
寺三
麦梅

明月や花女のまよも萩　芝
四月もタくれさへも面白し　白川魯祈
余乃そのの落しさよ菊の花　育山

奈良にて

片角を折てあらき麻乃面　天丁
涼風やタの汗麻る烏帽子人　信ノ栗夫
梅の雨や拭いてのこひ眼の埃　桝頂
蚊打奈良の都もさるまいら　公石
蚊るの連う高合へそそよ初雲在　大坂百堂

梅白し犬も足速く麻乃疲　元風
鼻杖りえて山そ時めく　侘丸
案子売の踝よう人陽去そよ　風
若ひの箱乃又ゆるみくる　丸
築杭よ月の細みのうかく　風
うぶ〳〵のやくもなる秋の一日　丸
極の茶れ赤いなさの次まよ　風
男まつのもそそのめなる　丸

土くれのゆるやかうの恨とや　風
指揚人の至ちぬ　夢
牛の乳を絞てもれを涼しう　九
祝祁うたうたう　笠のちひさき　風
月あての蘭菊は酒を肥して　全
虫のなき音のたうさ灯火　風
なの駒往来の秋そぶかせん　九
屢もかさゝぬ例の優婆塞　風
亮の連　雪のつれとも遠びらう　風
ちう啼てもいそく出中の苔　九

交れを驚きくとろ迄う　貞女
笹の香つれて旬おれの野　雪渓
雨上り畑うつ新の毛栗まる　柏儀
秋のさせを山乃かうし　應壱
三日月のうつさる新の清み　維年
秋乃姿をつみ一椎葉　貞
良雪の苔のちう道ゟそき　渓
漏ぬ晴のけよを待ま〳〵　儀

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

男さうし

亡年　貞享二年

逢坂といふ関を初こよひ京上布

貞享二年　寒痩をいとふまでなる

亡年　貞享二年　牛車おさへは藁のちり

亡年　貞享二年　月薄き軒端の窓の行格子

亡年　貞享二年　周防れも軽き　起ふし

亡年　貞享二年　かるさまで年の初の艶のよく

亡年　貞享二年　つふりのまる黒木　幾束

亡年　貞享二年　数ならぬやうなのくるふ　花曇

亡年　貞享二年　泥よもむせん　帷　鳴るなり

姨捨の侍を帰雲雀の那　深月

月なき夜を通中花さく　仲九

夜の風鞍垂るく吹るて

あなてよくきくちの滝の麦

袂ひ物往ましくきそれ　月

二三の丸よかるさち　九月

面ふき並木の松の曲やう　九月

菜漬の代に根ねをきる　月

望一ぞきめる斗よ笛寒也

古き松なむの一
月をて筑紫の秋を
香も移ゝき差物竹 実
稲扱の唄もそゝめる
旅人の小家よ夕
干阪またゝる鳥を
川をゝて帆を
羽未のいろもきえ
葦ゝりの雨ゝ神の
日ゝ

九月 仝 九月 九月 九月 九月

天木堂尋真

夜除の小ゝるく夕
おをさゝちゝし来を
灯屋を落ゝもるの
傀かゝけゝするゝなれ
月神く去よ児れて
野をせゝめゝる芭蕉一
かゝ橋の杉を林
遠さゝあれを烟を
旅人の小休松の枝

柳頂
公石
頂
石
頂
石
頂
石

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

妙義楼名の文の霧折
旭も照よ有付柔てうめくらむ　石
風のちり〳〵の玉砂をおく　今
仮初の机よ月の矢をしめ　項
情の霧のすゑる永夜　石
今年まで異腹奈をもてる　項
篠折くへて酒をぬくめる　石
五位六位花せぬ人をなふ　項
雪もせまよ　晴をと帰れ　項

寂りをの乃竹ふむそ会よ　應壱
川の音よ色をめしー春　涯山
賤やそ乃ふ見欤似よ雛立て　桔儀
茶碓のそその眼ふそ重たき　学渓
家根葺の胸よ捨そる行の笈　貞女
月を拾ふてりそな　壱
菊の香の流れそまふつそ　山
蓑をさるせそそふ秋風　儀
薪担るかそへよ石を割そみて　渓

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

都乃たよりもち久しくれ
片思ひ思ふの会ひむしーー里
もえかてよする里の会ふ火
ふるさき月のきそう戸邪
筒の青いろようてる水仙
鶏乃春いなるまて絶えまり
むのーー乃さ毎の足あ山ふち
会ふすちの春茶をさすそ花つま
栗のわられを名のふてもむ

負壱山儀渓負壱山儀

をる枝のひとつも足へぬ梅かな　天丁
生栄さそふ芝乃新のけ　柏儀
蘭ふん鳥も妻のおられや　侍丸
くなみしよ秋る雨水　丁
有明の思ひのみよ浮く　儀
煙茶れ乃麦のをさなき　丸
杜杉のもけみをすん山境　丁
かくしたく橋よ月を細うする　儀

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

夏ごろき積の礫を清なかし
入日まのあしき 汗の 六月 丁
雨もも〳〵 蛇を玉よ磨きあけ 俟
京方北御成をふれる年行司 九
稽徳ゆるす 暇の一むれ 俟
才の上を言士箭よ 見〳〵孔 丁
志盲ら承を去のふ 編 笠
月花と道と分れてうたゝ
あそれ温泉の香よ夏を近よる



降さうな雲も 時ふ 翠羽
筍をまま〳〵 落を夏よ 俟
山丹の庵とさよふ人もなし 九
さりけふく春ふ岩のそゝり 羽
うつくしき秋分の江の月のつけ 羽
秋をうるさく犬のまつもる 九
新俳〳〵菊頂の中 返 羽
七日の夜湯 誰もさめぬ 九
浅月しきおとろの蛙を挟み抔 羽


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

津湾桑の苗ちをあつこる
入おをおなる雨の降おして　九
鶯もおるを寿おおおしろう　羽
月の院塾余江の宵も　九
秋よ雁よそよろうもせぬ　羽
狩人の神をおさ一て　羽
水霜添しろをと　九
時の花かちけなのしも　羽
膝よそなしす景　九
時よそなしす景る　羽

芥生

蛇いちこ江湖流れよ　士
中ゥ私おるの風を　先
極をよ莞筵うけて　伴
ろみなのしよ乾く　九
翁翰を跡返して　先
筍をやしを厭き　九
布さん川の流の　先
眼をそこ称しと伯母の音仕　九
苴よおる橋の汀　先

女希美松を嵐よおろそ　兎九
うつゝの床の初時さ有明　伸九
毛見の元の住れし後の新やう　兎
入江の魚の初志ちよ　伸
汚姫の動くともなく近よう　兎
世を一節よ　芭　ひく　伸
志つくこと房付兼る牛の鞍　兎
雨の降れよ酒をたそ　伸
商人の乱れ立ちおくれ市　兎

よむへの地震洗ひ雨よる　九
股たちの形ふいくちよき　全
袈法みるる　福示の秋　先
月影の糸う初きおも思ひ　九
霧の森のひとう　筵延　先
化粧よ人　峯くるの乱れて　九
滝のたちのそよう　先
山聖るの糸心よき美　九
夫をたいまうみよ　九
連

鮒鯰蛤めくる　夢ごのてく

これし泡のかく　前友

初鷹の鈎き雨夜の星まれや

野地さむしまし遠山のこのけ

宿駕よ肩の法る旅乃上

枝蹤の科よ云称る和菱

青表白曽良よ此をつふされて

仇蕨したる林罷民の音

るのふのふとしと眠るむ

仲兎　仲兎　仲兎　

素の振ふむ　嘉の坂口
三日月と雪のうつろきもの色　仲
はのうと耳をかせる屋金　鬼
姉雛の智恵かうよきる白うさ　仲
幸子よむせて赤うする　仲
蛇よけの守よかつる角大師　鬼
葉稚のう称を越る結のう　仲
世の中も若葉の花の連もなし　鬼
夏も松納　嘉そ

・風秋着て　仲九
嘉壺や秋のさらくもなる乾神よ　肯山
盤もむしらぬ狭き延の月　抱儀
厂のう松の嵐のすきふらも　兎九
砂利売込て座すきふらも　菱柄
第一把児をあゆまする肩車　李渓
師走の陰の上のそうなる　天丁
何云うつ指さへ、貧ぬ族うも　仲
長うなうる爪さをきうら　山
古空のお姉しくうる房

姫のごまよう風葉ふるう
竹の葉をおよがす池垣を
きのふ黄ひし守護
秋ふかみこころぼそき月の影
松明ふれを発生ふくしたく
きめしこと務よ嬉をおもね
雲板ひゞきて寺の飯時
おぼろけの人の心よ花咲て
名伏ける紅法ふたつ雛

儀兎　梅渓丁伸山儀兎

小青軒にて

有明や麻火屋のひゞき独なる　杉亭

筍を根本よくさる　伸水　抱儀

腰蓑よ五力春秋をふるみの子

やさしき祖よ育つ牛の子　亭伸

準備よかゝれぬ石を持牛一　儀丸

人寄てやすき会欽の初花　亭儀

泡沫のゆれ裏を汐境　儀丸

うつゝともなき夢の一夢　亭儀

襲ふる心迷よもおーかくし　丸

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

消る計りよ金をあつ
鮎の鮨る白ひをくさう
思ひもらるゝ　八幸亭の月
勝の音　よ哀のこえる
園拾れを　せうゆるくなる
心なく乃そ林き発芭法師
伺のをうつきよりとる浮雲
花美き宮居の流去をび秉て
ふみ乃せぬ　蜻の羽をひ

亭儀　丸　亭儀　丸亭儀　丸

門よ杓杞あり混う晃を知さむ
杓杞深てのくまぬ養のね撫
初き烟りよ癈し秋乃畝
振やのよ月の花を寡なそ
丸をれ橋を越振しろう
盞撃る酔の径
竹の景徊を梟紙よ書
迂廻ある宮居よ風の葉之
牛返さぬ日の鶯清もなき

何丸　育山　棠渓　山渓　山渓　山

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

さなぐるよ磯を打ちやる
琴のうてよぬるきりしま開伽の橋の若菜
葉ふるく芋て三秋さ月々む
織さしの蓬よ夢方の匂ふ
鶯よ鳴る驚るの聞ふ
汝なあやしの小糸潜抜て
宿借るまその雨の氣をび
一向き花々る欲の面ざさ
毛虫も蝶よ放おれせふ

溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　溪山

喜近々誠の菱笠奏出て
端居よ肥之川敷を厭む
内中の者ふれわつ〳〵いわひ哀
雪風洗〳〵く磐も森ぬあ
一篇よ道の杉菜を打延
さまくま城のう杜
改元の文字を義度も恐ひ連
ふ〳〵葉乃泡のもくしろ
いうな幸ふそうもせぬ嵐罠
ふさ望て秋を走ふ

溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　溪山　全

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

松の月世の泥ふ歟はさ〳〵も
霧金とてう冬の居ゐる
送〳〵ま〳〵馬の尾を足透て
俳刻むともそゝぬ狙板
夕雪の硯よ向ふ法ま〳〵
判る祉をなき艸の苔よ
朽そこの花も雲の移もむ
もの庇まて夾のう〳〵

山　溪　山　溪　山　溪　山　溪

松笳亭ゐて

雲む〳〵の涼く見ゆるやなの月　伸丸
出おろしとある川水と　李渓
折つけよる焼の秋味噌白せて　夏柳
小性の児の行ふる次の名　育山
夾雨の祉よく春を蓬ふを　兎丸
いら〳〵竹よ簾のあ庇まる　天丁
白扇団返〳〵〳〵名このやし
瓢の酒乃庭よなく
箪の壱の瓢のさよさあるむ

渓　伸　山

肌着もなさぬ俱利迦羅の札
石鑿もきこのぬ斗りの暑さかな
今年より牛のお不きり月うけ
蓑笠も恋の姿もなこのやとろ
尼もむこの一の秋を泣浦
なまけよ糸の自由の人通り
新後馬の後をおと泣く
蓑よ充去誘引てを散流のる
仔勢う小屋よも陽を

杉丁　伸鬼　菊渓　山梅　鬼山　丁鬼

ふ将

風の行末や杉よまつくん
水を岩よたそこのれの蓑
加るの着馬の北をあなこて
あこ煙そよの色のはむろ
よめぬ秋月のゆくよすらむ
三蕨よつけて森のさなくも
肘松おこう忘れてるおなき
もさけさいの杖をいう
大石を人ませやう剣さる

亭杉　将伸　梅鬼　菱音　梅山

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

ちらく寒むる南窓の淺
時雨あやめの雪を帰志めて
ちゝね心の小田乃中道
秋風よ〳〵戻さゝうしろ髪
月見上戸といひもすなゝ
奠基よ気をくふるゝ系翁
再うごきなの育甲斐なき
初斗の花よも伝る思まて
絲塵さゝめる蜻いんよせむ

山鬼　伊尊　柿将　鬼山　伊

香暁菴よて

冬の梅をゝむとすれそ時雨ゝ　伊丸
埋もまゝゝよ蒼む山茱萸　菱柿
ゑ起る実の袂のゝ子　抱儀
ちみしたくる魅の滝　杉亭
来林の芳萱刈よ亭ふらむ　育山
とちともしたのぬ風の吹き　公石
首途の空もくもつれまて　献歳
物さわゝしき馬の奏　李渓
鳥罠よかれとゝもゝ嵐　松琴

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

つま木とる むら雨の歌

後の袖よくぬるる葛竹

恨〳〵人もうやむこの頃な利

月のなき晨柄堤をそぞろありしと

風もやさかよきをもしらなく

岩の角秋の来色よ知らよ

湧井の水を皆汲よまる

咲ぬる花おいらめ斗よそ

玉箒乃蒙の去留〳〵三

九　梅
山　亭
歳　石
琴　渓
梅

松よ春〳〵あくてゆふき時雨哉　平山

つゆふきを押乃菊の志ぬれ香　侭九

山澤の捜秋を庭よ　春込て　山

やもめ家鴨の酒をひよ来る　九

月をときそ遠の連歌そこしよ　山

芦かやそよそはの花をく　九

木の陽の夫さ〳〵秋そうし再　山

戎夜かさなる古郷の麦　九

竈蓑よ立庵風を射てをくし　山

雲の移るふむたと　九山
一瓢かうたる酒よ客を見る足え　今山
角力の太鼓月光るなり　九山
陸奥の尾駮の駒の通なし　山九
野分そよ〳〵吹く　秋さく〳〵を吹　山九
鮫ほろ〳〵笠の佛よ漬行する　九山
妹を見さく〳〵起出よりう　山九
亥北わたく窪この苔のあをて　九山
亥の姿乃水車　山

今日もふきうの詠のや帰花　信州連　楚泉
炭うる翁附そ童うう　化成
風の松を入もまさぬ事色そ　尚故
きやき酒よ盃をつくろふ　天来
月の前一句出をくう〳〵この〳〵　子寅
雲吹りう〳〵松　尺水
浴戦の秋々より人の心つよ　泉成
吹うる麻を売程よし　故
きぬ〳〵を荅むよ百合まくら〳〵へり

かけ聲のなさき鍋の鍋おす十
座さゝ称る家鴨を川へ追おろし
大師の利生おこそ寒
三日月のあすよ狂ふ雪の色
親子もわろく蒼うつく
格子こゝ酒を呼込客の陸
枝蠟そこ称て鳴く鳥の巣牛
咲花を奥の毛脚の長よろ
手あぶきなる紙団ろ
来
寅
水
泉
成
故
来
寅
水

下サ袋サキ

第庵や帛帳をが利のおぶ海　敲雞
まら庭よのせる雪の新　春
山ふ〻ゐ雲ときえぬらむ　雄
遠郭馬の二疋ゐ　雞
酒ろまよ月をかやゐ　全
こもうすゝと思よ　雄
ゐ〻ゐの月をちきそを　雞
雨晴あゝ〻のとよ夕　雄

琴を引く人よ恨の関かけて
すき通るほとゝぎす病の癒
朝鮮は朝をきくも三年ぶり
風薫る赤き玉座のうち
入月ますをの芒戦きぬ
ふもとのふれて戻る旭吹
除靡醸醪よく造り加減せる
猿もの伏せ返して花の宿
帰る日もうさも忘まて花の宿
こゝくゝくも竹の藤

雄　仝　雛　雄　雛　雄　雛　雄　雛　雄　雛　雄

夾雨の水なき池と名よ立て
そゝそそをれ老木迅速
世よすゝる思ひを牛の踏ゝめ
胸あひこの祈るさるとうの花
廬家のそ奈くも竹の生ひ茂り
霧そもむなうと山の裾ゝく
新和や新をちこちまん〳〵の
海ふかいの浅を爺うれ
月くるみ吹を吹新のむつと

雛　雄　雛　雄　雛　雄　雛　雄　雛　雄　仝　雄

伝もれこはるゝ麻乃かの
月よとそ植ゑる松のさ
上塗せよと 隆や
出来かぬる 面(ヲモテ)云ふまで
通ふ庭みのおゐる
たゝしま鰐に吼る
役者塗られ醫
志ゝ貴ま奢をせる義の
犬の眺りをさゆん

雛 旅 雛 旅 雛 旅 雛 旅 雛 旅

ま
眺るうめき山の
市ゝくお丸の土橋
裏を振〳〵馬の
有明の月の寂さを伸上り
旁ま弱みを見せぬ臭
若車の坂まのれを帰
松明の挨うを風
雷の響を伴よたゝふ重き

公石
士衛
侑丸
石
衛
丸
石
衛
丸

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

友書の癖を人よ笑はれ
楠のみの羽未多きさ拍思ひ
いつの吉白し箸を愛きる
豊年乃手を月よ合点して
ろ引竹の寒もむをそん
なつしと糸のあてのなあすき
おむろかへを呪ふてきる
苑遠路まの尻よすきし
来びっそそ人のむ排ふ

石衛九　石衛九　石衛九

おつちまと度ふよ五ノ深月
次ぞま森て流緑へ帰や時を川　楠
傘投て出れを月の部三ノ賢英
注汁よ打しさや中の月三ノ賢英
楠乃匂ひもすー寺篇ヲキヤテ子悦
もの樹よも氣しき杉之際の字慶之
一本よも雲百よいつぬほそ二ノ月訪
打てまよても活さよ牡若五ノ、
もの新の傍てちれ放子の苑二ノ孤猴
ぞよ雨の秋よそし時を二ノ一露
暑き月やよ忘れてるの帰二ノ桃旭

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

枝川に汐のさしくる水鳥の
羽風もなびく杜丹哉　八ノ津月
秋ふかき野の中なる篇蘆の
いつまでも啼やもの鶉の村塚　孤雲
女子ちらや男の上のくる旅の尼　亀川
六月雨よ恋の住てもそうれしき
うき山もおれのこやや雲の雫　三ノ丶
十夜こゝ外
釣り月掛くるこゝろもとなき芝　亀里
明くや四月のそら霞む物の花　寺々
百夜もすがらくやや雀　並山
鶏鳴くのもさけぬる明の花　浦夕
花卿　玉兎女
記亜　信西来
尚化　霧翁
帰耕　スキヤを
孤雲　五ノ
麦風　雪渓
吟雪
山雪
戸故

栗苅ぬそや雀のこやす日和の
垂穂を引遠くくり夕くもそ
そのいそそる垣アのめくり花
酔ざめよ稲妻砕けめくもよく
稲妻やぬれと我が窓の先
見物しらもよ背打角力の角
雨を智ふもよ柔和の窓
女郎花いつくりのけ九十九髪
康明や末に教へて捜九十九
及古張の行於くふし康の右

稲汁まのそゝし流るゝの上　風山

おもふ頃となりぬ麻の季　光月

杉もせて幸の柘木や　旧十在（トラノ門）山石

麦飯の飯のさきうち後の月　記千

小男鹿やいふ迚女の泣おもて　月滄

新乳よそゝの児の掛くりう　智志

鉢屋民の嵐も迯て夜をふく　可耕

年も流れめなのお秋の雨　小子

酒もくも菜は心あり萩の花　松月

稗よ玄圃の糸瓜や後の月　里久

衆世庵一溪の志ゝや苔の花　上井在二ハ於テ江戸一ニ

月のかゝるすゝ森雫る深さこの秋　ハ

雪ふる迚見失ひり雑雲荷ミかり丁三　有

雨花や石のさゝよ青れ　雨をサカラ水　亀

する徳よ俤うつ筆ゝ筆綿竹　陽氏

雪の森真よゝや雪ト云ヘ雪ト云ヘ　羅月

暖なゝや汐瓶のら春　氷　水

公物甲田子の浦波有る　川

ゝの花よゝ後の角を丸めり　下サ舟尾　素糸

山川よ日の志ゝうて雪解め

ほゝとゝさん嵐山さゝ雲の中ラサキ　玉芙

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

山ふかき日の行衛 元尚川 翠翁
雨雲もたゝぬ梢の雫ふり 後スマツ松古
越す山を彩てそふれし日の紅葉 雪頂
霞のうちもてそふる春の神上テクラカノ 百壽
春なる花を乗り込たる扇風か、舷ニマ 桂園
波音を松よ遠くて汝干うなゝ下タキ 孤猴
小舟とのうち分てまゆみくそう 初小緑、 桃五
五雨よ打せてうたゝきを忘れうふ、 神田ガ華 桃川
雲ささ名をもぬのれ仮寝雲汗、玉ムラ 以寧
うかしてりや雲者の嗜方へ、 桃井
雨雲のあとのうら三年花冊木 彩ホリ 倩登

松風もう世ーと変て張小下サノ系 秀苑
伝乃てても来斗乃や 花松
雨よるの其の模様秋の雲、 桂嵐
月のそる空よあきうしそ、 櫻景
新ーく幸おやりの菊の庵、 荒子
大乗や玉の塔の供を 竹の花、 湖月
山空の雲を崩して吹武安リ 勇船
入れの後よかまそあこの 柳暁
幸志の人や弱りの勝の夢天祢下 献菜
うかしてりたまりの花散 三

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

死木よ名柳もいとゝ淋しき　等渓
夜と友よ酒のいつくや春の月　七ノ
松風の月をうたふやお汲み　八ノ
秋の風一本唐尺空めぬ　九ノ
雪の帰方こゝ暗めぬ秋の空　十ノ
秋深く雲もなくなる月　十一ノ
庵守や庵のお音の月きよき　十二ノ
松越る旅の高や月まさよ　十三ノ
うかゝと出よのゝや秋の雨　十四ノ
庵の秋を住て暮しせめ　負女
[illegible]　十五ノ

[illegible]村一茶ミノ介　遠波
なふて山も夜寒の季　眉山　三ノ
初汐や磨よりもくろき　南村ホリ　英山
焼うなる方や秋の夕　野川秀舟
ちおくれ来るまゝ柳葉より　元游
名月をこゝのゝなう花木槿チンラ　葉松
葉のゝ折て包れぬ月　三羽田文英
新汐のゝやてまる波ノ多　等渓
初庵の秋ゝ永名を湯より　五ノ
秋の味そのぬくもうつまり　七ノ
暑る日の心乃死て村すゝき

的月よ尺のすゝ山や樹のまゝ　十八
大菊の燈ゝよ秋の雨のふり　玉鰺
素湯よ生笑夜すや月二十日　馬幻
寄生や秋よかけぬ夢の松　嘯月
柿田のゝ淀まや雲し水　千住　馬犬
初雁や松風若ゝ淺ク落ル　玉兎女
姉ゝつゝちも秋の蜂　小田　柳葉
田の限ゝ淀あふさ甸のこゝ　伝松代　何之
春ゝまよ一抱ゆゝ　悉　翠江
菊の香ゝ夕ゝ夜ゝ　大代地　菊和
淋しさの奥を見せゝう後の雛　千住　魁角


秋の蜂鬱のまよ　返し　何翠
川筋の水よ小ゝるの秋を　帰井戸　南月
そ年子の鶯年貢やさひ畠　里長
葉や業遠のメりよさ　松葉塩
吐ゝとも忘めて勝ゝく夜ゝ　琴江
雪よゝ雪を添て菊の露　石山
森のゝの折てゝれめ月萩ゝ　孤水
寒雲ゝ垂ひて寒ゝ　案松
うか逸来の幸ゝもゝ　歎水
汐生や萩の系をゝる水のゝ　英丈
　　魁角

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

なめうと初きくもせぬ蚊帳哉　芭蕉
鶏頭や門田おてゝ秋の行　李朗
公孫の味さ夏岩ほりす　柳項
栄のそたゝきそ哉そこの乃ふ　松鳩
おうの汁の茶そ赤よ入ぬ生の夢　九ノ
法柿よこまゝ菊る夕日哉　朱鷺
されそそ啼ぬも淋しそうしん　里春
松風や千代万代を月の秋　渓鳴
袋ゝ〳〵匂の滅つそ年の暮　等拙
月御もほそのゝほくしそ琴　起雨

東郊ふをひくくる
深志つむ筆文や月の細壺　松蘿
郭公る風乃汝多　何丸
糸萩落乃志みゝ秋の姿して　蘿
名村か消き人を乃　丸
老る乃輪の雨よ中天落葉哉　蘿
汗かゝ〳〵すゝのり鞠乃反き雪　丸
へおの旅る身乃上ふゝくら哉　蘿
雨乃戸口の犬を押出　丸


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

今
蘿 丸
蘿 丸
蘿 丸
蘿 丸
蘿 丸



抱儀
古
佾
臼 丸
臼 丸


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

滅を乃百整なれよ酒の誘
雨のたるみつつ氏風よ百
枯芦よ陰乃社のてら
月乃ろさふ仰ぬ沖の潰
い免むさる名ら胴の音を今
裕乃朔れあさぬうこら
実以川越さ田舎とおぞまる
人軟刻む斬のふきさし
山峰の恋乃使よ宿交り
葉ハ乃ちる月をさやる

丸儀臼丸俊臼丸儀臼丸

良衣小さ斬よ節を休む

おもふ雲沢月をうけなり墨川 閑高
芦よさのふよ子川汐の夢 稜儀
繰縄乃秋をさひくさ 何丸
鈍よふふ一扇流名る宿
塗かけ乃衣桃の簑れ
日和さ免おろ乃 解曲
等乃人を免もや免を
桁府門石乃私を木し 迎

儀高丸儀高

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

齊系乃志ゝを十かゝま
卅志を二十日菱さゝ志ゝ
遠山乃雪よゝ木の接むら免
あ川まを移むつまる証てよゝ
結雪と月よゝて志ゝ衿の肌
若なゝろさよさまを
ゝとゝ以よ紋を蕭菊を書ひて
さゝ志の大まよ喜徳乃神
亭よ集て縄合のちよ恋渡
柳も雨を祝ゝ
まゝえ

九 高 儀 九 儀 高 九 儀 九

既帚小まる朝よ息よ

十六安千泊乃ら移ゝ物ゝの陰の富
或よ志む末作よ春乃きゝめく
蒸ゝ寒の世まを心を架よ春て
外面乃松れ果すの
生海苔の魚ゝ志ゝ変乃河辺
既や蜂やよむさまき小臺
帯板の音を志川矢る一霞
切走乃ゝすゝ刺刀乃ゝき

桃洞
抱儀
伸丸

儀洞丸

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

中くに形又乃袖とや
大之夕ア俛しけみなく
磯まじを風の絲ふみく
芦乃折ふを幣はそつて
さらくゆ二十尋月の名ぬり
秋をふきまじ色多る乃群
籟乃骨志ちるもあちきまや
汀滅りしたるか跡のなのやうた
芸哉日又古人時ちまふのうそう
中乃面お人栗石ゆ比中

丸 洞 係 丸 洞 丸 係 洞 丸 係 丸

怎くの矢猛心や菓の花　馬紅
朝日くろ乃月の夕香　伸丸
連珈乃おゞろ秋のすゞむらむ　抱儀
芥乃本の古ひまくり　紅丸
時雨て冬咲てまれのいさおま　儀丸
莎乃志ちちの涼なる望士　紅丸
ちみくと音乃怎る陰翁　儀丸
杖よ刻みて柄乃をさなを　丸

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

石菖乃一枝ふく風後る
夕日すゝくあるも博奕
もけおもひ疱の枕屏兼く
戸さゝ乃冬の陽英さくうた
蚊帳もて消火寺さる月の宵
閑さゝれて客をきこのよ
系務よ細け詞のて舒時
中路乃ゝよこるの車する
うつゝと田中の寺よゝ
うちち乃俤をさゝむ 磁塵

儀紅丸儀紅丸儀紅丸儀

会芙蓉たて吾妻の秋てまし
山乃かゝちを見ゆる功大
松柏なゝけゝ野を立徐て
車乃ちおゝ寿そ
村ゝ誇ま大言ゝ
侍ま乃むしをつまゝ
簾みも男女春ゝ日もなゝて
峰平ま氏ゝ大仏の雨

むくら
耳砂
木雞子
柚良
之滴
雞砂

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

静謐も茂りて今は神さ
恭一八を仮乃名よせる
忘凡の吹うたる
小多ともたてかけて
実人当乃来ゆく就
七答乃紋むらの苔
ちよろと十五堂乃
紋当七日の菊を割
ちつぎ八雨乃保しきを
鈴よ吹る 鮒 乃うり

子滴良砂雞 子滴良砂雞



弥とりまき枕の花 獅雄
囲炉裏さひしくもゆる松墳 抱儀
又五帝乃何くが西当て 伴丸
ものいふのなきろくろ 雄儀
夕月乃おかきさ馬きる 丸雄
簿さりおあ乾山風 儀
さしし角力の幣をふる
未年川乃秀を汲とる

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

伊よつ子神楽のもとの乙女さん
年若うて神もこゝろの
情あれ雀のやどの
温泉のあつたれまる訳を
月よりく中継乃匂の
垣根乃あのよう
秋よりもちまるの
世をうんかねうて粗つかまつり
すゝきの根よ人をおこそうし
稲荷の狐乃号乃中

九雄儀九儀雄九儀雄九儀九

旅窓

乞食の大そまりや雪ぬり
冬をさそする味もむ乃ち
里淺き禁の格
路と波乃車まし
月氣の旅先をまのむ旅夜
轡といへるむし
初秋の振袖子神
垣乃菱年旅白雲

いそほ
把儀
伸九
ほ儀九
ほ儀九

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

おしふ犬乃字(アヲナ)を唱て
狩りまわる袖を引うごく
かくとよ風来る根をいひてけ
そもうれ萩を御庭に植
栞一把ふり捨来る月の夢
またよる乃波り初そう
花しよ読そめ幸福築
そそと出かち乃美ぬるよ支
盤ふそ志の花と
うる人きよ中乃せと撰る

丸 ほ 儀 丸 儀 丸 ほ 儀 丸



千もとせうえう

簀子かう掃のを見てと掃ず 鶏山
よふ好きもやまふ 抱儀
蝶乃愛二番雲花おそ 伸丸
うとし削る田楽乃 峯山
そる月を屋根葺もの 儀丸
牛ハ本種をふるむき
機乃むら城落のそよ
岩もるもの耳よこ

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

人之一生

重き荷を

負ふて

道の

小石

かな

清流ふかく立ちさくるさ
開寺も秋乃氏 寿井 橘人
うち水乃俤そふ渕もその底
きるものをうし 苔の かつら
拿ち橘すゝふや志賀と 信濃 千代女
馬ふと我れ松陰に立て女の乃 上毛 里圃
芳名

松風や時雨やそ松 村と 江戸 可貞
波ゆく一田 摂津 丁冬
志る秋乃 あのこゑや芒のさきの 下野 一樓

有あけ乃性こてるや村尾 武蔵 負子
多多ま多る雪を吹 鶯 応声
山時乃雨のそる寺の 未乃 鵜柳
ち新秋乃志ら迎 松風乃 江戸 一磨
名乃ら 花角力 初山 全
童向山へむけて立 秋の 全
淋しみふうつくしき 武蔵 如花
旅乃そゝそ兵 松宮 如十
秋の幹乃中 寿 兎丸

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

大江戸の月下涼を上之句　浅中　一之
秋乃日を芽のそ乃まゝ、　十衡
相二楽さとゝ女人を球ゝ中　馬喰丁　其井
朱硯の夕日を拇む持玲　佐倉舟尾　素舟
廉乃陰のきえねそ女の声　抱儀
袋の百もぬかりあり　少女　鶯渓
多流て今朝をそゝ指投せ　全
古秋を何よ書を吟つれさ也　負子
秋の雨囲毎乃もゝ　一磨
菜乃ゝ云葉ゝ芸ゝ　〃義多　喜峰

凍るのあとゝもゝ　芃蘭
降ものゝそれを冷たき雲哉　全
山茶家の着衣宝机　士先
根つまくゝ次柳の枯てゝ　舟琴
乃お枯木の下や不ゆ乃月　亀石
冬ゝ就松をゝ厚みくゝ仕のゝ　喜峰
雪の山ゝ雪の影家月夜哉　如松
菊よりも掃ゝ妙ゝ本ゝ哉　其月
折か什の烏帽子ゝ見つゝその梅　桃村
若ゝふゝ葉ゝれゝおゝぬゝ冬本之　抱儀

せる人の
うつくしき
夢枕かな

判者
常笑画

連を見の関守る氷の砂
おもしろや六の字見ゆ雪の雁
たそむ枝の反よ手ふえ雪の雁
十月も今ぞ初の時雨かな
一まくも降ぬ筆捨ぬ千鳥
め升ぬ墨の地よ吹る砂
雲松よ雨もふるぞ沢升迄
波ら落し形松ぞ笑ふ
みそさゝの茶売の掛をかるゝよ
待宵一月の細さふ千鳥

素舟
翠羽
百合九
一朝
田美
秀志
水兎
結客
雨苗
寿仙

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

ましみそ新しき柱かな　竹泉
風よ吹ちぎれなミりの松の月　松風
波も皺足透所をよみその月　浴月
明うも也ひくしみよむ御　其井
曉や宮作きみ〳〵彼の矢　士先
一しぐも同し松よおる同しを　詩好
雨のある日を待たる時雨かな　桃加
松風よ笑う風吹也多勢　勇雪
雲風の中〳〵出たを紛たき　桃村
夜の雪みつともむへくも安うり　松古



みそ新しき柱かな　竹泉　探題
引よきぐ安ゆるやその山　立川　浮月
多多の愛以越を也比處はる　全
波も皺足透所をよみその月　全
治おきますやの岩也未多以　兎川
冬の日乃やうし俗〳〵秩みせ　栞女
庵。雨日の夕陽をおぐるまで　常よしこ　此君
野川の名色足うも安ぐ九山　士先
巨燵かう雨の野山をみやうく　蘭石
みとうの浮世通まてく吹松多戸　雲太雪

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

寒月の姓来をてるひあり　椿奔
降もよるめれるほそく炭俵　仝
帰る日をわのそのすてゝ小田の鴨　神田
寒き居をかもとゝ小雪よ降もう　南キ丁
りもすむおなし山又るる宝しまれ　若水
十月や旬飛さまさき来　俵よりかへり　一窪
笹よ月吹きく冬々の風、サイタ　桃旭
松の戸をいつ打すも時雨うう、下タキ　桃丘
旅宿を来こうなる紙衣かな、ツクシテ　勇雪
爪突よ人々風ある炭竈かな、サイタ　桃川

のかぶ百姓直る新年　上ノ
尺ぬうちも日よまと冬の月、玉村　浮三
炭竈のうら高堂二はなく流れ、　桃井
あけむつや素上雁行橋の人、　月桂
鼠ゑふこふこの中や紙敷　庄内　以寧
十六ぬ来ふ水の先へ歩う　素郊
冬桜毛田口をせふ　タ、の夜　信ヒシホ　起直
白雪のちるさてもう及よまる、義前　越州
むろ咲乃梢を娘も冬ごもり　菓和
おかけも白北なりふゆの月　信乃山　鳳山
　　月船

風ふきうつる合せやうして　吉田　子寅
鶏乃うつるみさやのまゝる枯野かな　柳丁　柳頂
掃出すあとよりふかれ木の葉、　柳水
雪やみをおこのうかやう念仏　武血洗峰　貫斎
はらまおのあるを宝とまき栗よし　竹人
雪乃おもめてくやう滝の音　仰下　小女　い祢
名ゆくの流るまの上乃うり　鵜柳
は雨そやそのいたるまの一木立　一磨
久ちおつて不及のゆふの芒垣　全
夕時か山之直そるこ戻りうり　全

筆とりなくくくうり王氏
茨疲て日しよつまふれ尾芥
まおくへ一月乃雪しまる走り蓼と
綿帽乃底拂ひりおりしす
うきものや独身えよ秋の夢
面ふくなて仕出し柳のふ
月乃芦庄禁を水よせられて
秋の日をかき屋しなる熊ぬか
梓巫女乃出て月設や柳ちる
中おくりとそそふ財を桃のふ　上ケ

翠羽　吉田
菰月　柳頂
淙月　柳水
暁梅　貫斎
双英　竹人
梅秀　い祢
檸景　鵜柳
暁水　一磨
呉月　全
得一　全

国立国会図書館　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169
ガラス使用

きくと月を吹誘ふ
秋風や白雲近き
秋夕景
晩れそめてまだ赤柿も
鬼灯やくちる入つ
神送りすむ秋きるお
此秋やものにせつく
白菜や空乃秋風も
何となく日ま秋ぬ
秋をおく馬や堀の秋
此秋やみるまゝ
月梅
押頂
有笠
越州
はゝ梅
玉誠
秀志
梅月
可観
秀花
如松

松原乃月やおもちもる千鳥　信仁
おさまれの糸切るう大晦日　天王寺
湖水つゞ冬の大うた　仙大士
時雨ふあるなまり山の月　幽雨
金乃秋の月まおさまれば雨ゝ　麻村
恒次のまゝ光て時雨ゝ　立川
秋葉乃香も春ゝ　サゞ寺尾素
朽ゝ経月ふまゝ　久二五
新法ぬ二ゝまゝ　武忍上村
山茶花や沸ふ松の風、

卜英
如松
天々
幽雨
麻村
浮月
舟
五十二
秀志
千玉

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

茶のもよ名所の沙汰せうう　全
うたたねの月夜念佛やすの入　アサ中　金鵝
つくろへて宵たきするも秋のえち　越上田　其月
野の松よ火先そくやそ霜の雀　サル工　椿斉
時雨てや鶤とかと二人りして　サクラ　可門
ほくまもれや新心を拵ふて住む　サル工　月操女
吹落ふてをくよ杭ぬの入日かな　浅中　喜栄
風乃妻一枕笹の月夜のお　千ブ日伏　少年　桂嵐
馬の尾よ月のひへうう杭野原　ハンニヤ　梅秀
初心乃秋よも似ぬよ宝の雨　鴻ノ巣　少年　松月

拍像　全
おとろや雪よたよ陽田繩ゐ　全
福を内とよするふもふ風蓑まれ　全
約束秋まうまうまうも山まれ　全
花笠のお流りきくく小まか　全
ふそそそる素ふり花のまぬ門み　全
吹日もぬかぬ白ぬて紛たまき　全
撰部尺圏行裏の山茨や雨の雪　全
多織衣の新文出さ尺大海日　全
雨ふそよ雪ふ追ふ猿鳥　負子
きもら尺るのそ音や障子　全

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

禁らいそさあてくう　青の雪　鴛渓
影うつる千と世の松も渺　々　　仝
みそはるもやてみせる雨うそゆる　仝
ふもとより杜鵑のおを呼をおこれ　仝
明戸から附雨て加田のかしーず　涯山
ふく附を雪とよや傳と上テ　排川
明売のみちおくしかよ庵儀　啓美
とくあくせ雪みそゆくむふ彼の実　抱儀
明らめるるいくもまをくる雪ちまを　仝
年彼のよるもそ夜庵ーと　仝
雪逗ー裏逗る座乃雪の下　鴛渓

えくてやふくろのぬくとより　仝
乃空ふふくロルふく山ハ附雨ふく　仝
冬牡丹一輪咲き仕也　巴水
山の月田の月ふを連くせー　看之
ふる社青小路風ふる冬の山　應聲
松の松ふよ於ふふく雪の名ニ義手代地　亀石
鳩乃ふよ誘引出ーまふ附雨ず、　如飄
夢ふふふふ彼の月夜や紙衾、　芳蘭
古木ふや雪のなり我雪乃年、　常笑
夜神楽や星乃ふみふをの又、　舟琴
一つ乙鶏の羽を乃ふそ玉か　ミトリ子　三有

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

夜乃雪路やむ屋ともちのうち　タマツ　松古
蒔絵の俤ふかき九山　士先
月新ラそかさすりぬ　漆江戸京　兎川
煤掃ク凡新ラ兎へけり　全
新米や叱よ童ふる町　天王町　如雲
又ふる人のちゝふ咳やその柿　庄内　柳一
雪のおや周乃居琴ふ千松ふ
炭ふおて影えふく戻りふく　代地　喜峰
待ラ初ふ硯や門日記　信牛也　玉柳
仕上ふまゝふをつめ〳〵雪乃日ハ下サシマタ　梅舟
究竟の男おひや雪又舟　丁癸

冬の月ものさそふぬ光りかな　勇雪
まつ風の冬ふ干上ふ詞葉かな、　以窓
おりふてゞ出てふ又ふ秋彼の裏
よふこそれふ初ふ人ふ蒸ふ捲、　桃井
独言いひふふかふ高ふかな　五凧
あとふ見ルふ古乃着ふ火鉢かな　平山
松ふ添ふて咲ふふ杭ふ蛇苺　雨苗
かくやへや干葉て世ふ安けふる　松下
灯火をかき集てゐる千ふ代地　牛乳
衣かへて出てふよふ雲むあ

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

日の筑ゝを持てゐるやうな
麻のちゞみも第一つゝも月おち
風乃月やなまた野ゝ夜さ、正治　菅羽
風色市の売りの水田甫　武蔵院　少年　蘭公
新渚ゝ松ゝ枝ゝ枝ゝ氷、　月窓
さゝやまの松ゝ枝ゝ枝ゝ雪の月、　月琴
るすのゝよ楽書しやうか、　惟孝
松風乃先おとふたかれみぢ　仝
さおとちゝさゝやまの月、　賛斉
蒲もかさ酒振ゝもも夜ゝ　仝

時雨ゝとみのえゆる雨ばし　兎丸
枯枝や猿の面ゝく妹の風　常田伏　葛蕈
秋のゝ月ゝ山ゝゝ隠ほゝやま　幽月
汐面ゝ時ゝの羽振小入月、　梅凡女
さゝ氷文ゝまゝのさゝおゝ　信州諏訪　翠雨
雪ゝまゝ風のさゝおやゝ渓庵　子将
休らゝさ宝ゝよかゝく時雨ゝ　庄内
筆ゝ枝ゝ枕のはゝまゝなりゝ　白川
釣かけのひゝきゝもゝ熊鷹　負子
意ゝ乳ゝ落て名の木ゝもゝ冬ゝ　抱儀
裏ゝの羽乃ちゝゝれやみ木ゝ　仝

国立国会図書館　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169
ガラス使用

降さ〻てみそめまきく〻そ
いそかし〻風をまつまやかま相
月をとちてゆく〻やし〻千ち
古むくや臥かこうかよみ
学をとちまもち〻森や
踏迷てかをまくとまる月の暗
等れてうれて風まきに
ひ〻は雨うけて立のく〻
梅乃歯をひ〻とりよ
いてのこま風よまる枕

全
全
全
全
巴水
應声
全
全
全
全

腰蓑のみまれ
家ひ〻ろよまの小
筆柱て関のたつる
変荷てうれて紙
まの風の連つる小
は雨うやをまかし
雪時乃月よう
雪降や風をまて
在帰て急のみ
綿冷る三井のまの

馬江
和定
一磨
全
鵜栖
鶯渓
全
全
全
全

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

有一村野を交りて田のみる
ふる枝を休むかすむいとが　彦乃十山　文柳
よそるよい枝ぶのたゝずまひ　丁癸
凍ぬるのもまゝて流る　苞蘭
葉枯て蛩淋よまくらと按よる　全
夕仙や火燵さまれのよい夥　常笑
おりふし包まぬ会　全
尺八乃ふつ発よ初て知の秋　常由依　玉松
海よおりて眺よくつゞ共千鳥　抱儀
夕雲を招よせておくそ雲をふ　信ノ　越中
きのよ法仕舞ー苔やまつは雨　立川
浮月

柳頂
柳水
弐山
小女　祢い
鵜柳
全
全
一磨
全
看之

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

雪降りおるそうの宵さま
みそみそのちのこを俤つ牡丹かな　應亭
糸と我との思ひすや　凍る一つ　芍薬蘭
泥のきしひそのまめる時雨かな　常笑
次第消く咄しの後ぜ　全
夜更まるも牡丹も下戸そろふ　天丁
みそさゝぬさらきへ迷ふより　三有
雪の秋句也書を吟ずるちの光　士先
千雪為ひとつまる時雨かな　士衡
浜松の山家をまるく千鳥哉　一風
蘭

初冬不拘積たの雪氏宅の茶もむ　松下藏守
吹おろす秋をの手まわや夫の川　常トク時　蕉月
なるのきく月の雪と雪と雪と　非四　若水
芳蓮を初氏乱る月おぼろ　立川　浮月
雪ふり暗ふまよ　下サノテ　雨苗
木葉川や雪乃流るゝ　全
雨ふくなて仕舞ふ柳かな　千ブ　西道
松風のまことを傳や秋乃嶺　般若　梅秀乃
三日の初き世学を祝ふ　古池　文暁
下サ兵糸　南濱

落ありて月よく映き学ばし、　濤塢
毛乃青よそみ（附を校ず　上毛玉村　得一
秋さく平秋の日数をうつ　（サイタ　桃旭
秋乃稼一日風よ追れつ　（下タキ　孤猴
又拾遺き魚社ありれ菓の茶　（下サ　（ナリタ　蓋三
ナ川風乃手よ新麦を拾ふ、　万古
ひとりてよ等て仕旦や稲刈家　（ツチヤ　泰山
羅乃ふき人乃雅なう盆踊　（ナリタ　仙杏
白菊とまろれて等め二日月　（ツチヤ　収石
いろ葉乃雲よりもふうの竟、　花桂

北子　（校ハシ
古十　（午迄
呉月　石丁
三有　（緑丁
田美　（下本沼
仝　
素郊　（テ　庄内
子慎　（フキヤ丁
花葉　（信一本木
鳳山　
雪乃ふね中よえゆや雪乃新
常盤木のつとしくえゆう松
日比底よ白よさまざまり冬の柚
風の人ま吹てきう製
十月や尾上の松と登下
枯ま〻よい日のつく野面
稲様まかく〻お布せ雪降る
本枯やどう引て射る矢のう
塀丈よまり雪の喜し
賛中からお宝作るあの声

松風の出口は冬ぞ来りける　すりタ
関もる行ぬ待夜へくら雪の山、　汶水
風や松一ならあるもの、　蝶勝
あく今多月夜ハものさくられて　月丘
さやのみ夜ハ脱ふぬをを驚文　士先
未杭のをうと止るれ　賢美
伽のものたるぬさ義藥橋　匪石
まつ風の舘近しも法たく　仝
山里を一すぎるは雨ぞり　一雀
雲風の上よ時雨乃横日ぬ　桃旭

物あて世をそうしるす菓伝
余をるふ多えて通ぬ義者
降りぬ仇よ除のえさり多
菓の雪乃約やある菓家が
映清乃風を神し秋の雨
未杭千行を流る日のあ
る杭お月をかくれのさ
る通ぬ秋を小るれ
胡麻売へ妹乃七宋を
温綾の石よ気日のつま
月乃秋をかく景をてる

菓和
椿斉
鈍八
清松
梅舟
仝
北人
士先
子将
鴛渓
仝

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

風吹ておもてのくまかく
苔のぬし蓑虫よ似一心かも
探金よてまつひ余るや小田の戸
有明のたゝの小照や村尾花
落吹るるの森々よ月や残る
そつと揮よ宝くねこ一石の月
いさかひのもつれも淋し秋老ぬ
出て乃松明り海秋も汐
雨雲をふくみもやらぬ末時哉
おもひ乃敵の風のたるをわすれ咲ぬ
飯あの泊舩よかる一塊うな

全
藻鯉
巴水
負子
應声
鵝柵
僅一
看之
一磨
全
惟孝

遠磨忌や百味を参る鉢一つ　佐賀川雷
連哥用の筆たゝふ水、のみ　作金井尾　素舟
顔見せや吹日の月も出ぬ様よ　翠羽
炭竹のけこ松を一松の新米　下甘佐沼　田美
松風の治まるや伊勢参、　成田　万古
山林嫁の月影うつる雨夕　武田　秀志
野路や川汲来の手も近つよ　全
すゝ雪やの上野も山冬く、　梅月
雲杉小雨もふるや神垣　遠相良　水鳥
風来てまよ松埃ふせ　山口向　静路

山茶花や全のるまで　雨苗

格子より女あるこ　全

冬籠足ぬ世の友そ　仙大　艸天そ

その木枯く色てく　爲文

走くめて独りよせ　里童

冬乃柿赤ひのち、　幽雨

ひ〳〵せの実名を　壽仙

火よ酔〳〵出こそ　是丸

御〳〵ゆめやうま小かな、　銀子

稲妻やかこ言よも　士徳

聯の句　相太山

紙楢乃名書ちの一存の句　南手丁　汶柵

庵ゆこち向て山こるま　上ケまツト　國丸

秋風や白雨除れ江乃夕ヤ　柳丁　柵頂

さひ〳〵さを泊る連あき　緒泉　杖堂

心ちちひさ〳〵ぬ秋、乃てふ　少年　松月

后乃秋も四毎ようつる后あせ　仁カ名陀　越州

の旁も石ますの月　エチブ　越水

鬼打乃嘯ひきてそ秋乃色　信西工ベ　津楊

名月やつ〳〵む今ハ人も上　佐州ほの田　鳳山

休〳〵こをつま〳〵て柳のなむ句め　仁西条　露静

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

アサヰ　故推
名よ飛ぶ〳〵雪ふ〳〵夕べかな　秀民
新福寺月うすもゝ菊や　魁斎ノ　梅月
川下へ青乃廣のるきあり　フキヤ丁　子慎
陣や尾灯よかる雨乃もと　ヨシ丁　起直
常盤木の松と碧らし〳〵のち乃月　下サ佐倉　稚篁
お乎をいそ〳〵馬や堺の秋暁よ　チバ　秀花
名乃吹よ日乃高かる柿の赤　行トク　美玉
康ぶ〳〵や北よもこる〳〵きそ乃味　悦川
白萩乃二ツ三ツ折〳〵みせ寺や　オルエ　元雄子



何のおもしもちゝをもめ乃あ乃月
やゝ初ぬ夕雲星にうる夕べかな　下サ内山　可門
そのふるも変のもとそ秋のあめ
須ニ乃ふるよりぬ月のあるべく　浮月
名乃ふりもるを乗ぬかうもり
はく〳〵もたもちもの子蔵か　よ乃部
芳乎もむ菜ぶよ芳乎みしの西き、　梅守
言埴ゝ塚よ咲ぐり昌隊ぬむ　下サ　浮月
て〳〵虫の乎ゝ考乃ふれ　梅舟
わゝ一枝のいろもる夕べかな　松は　貴耳
ろゝ〳〵き菜好るふり秋角力　秩父　嶺松

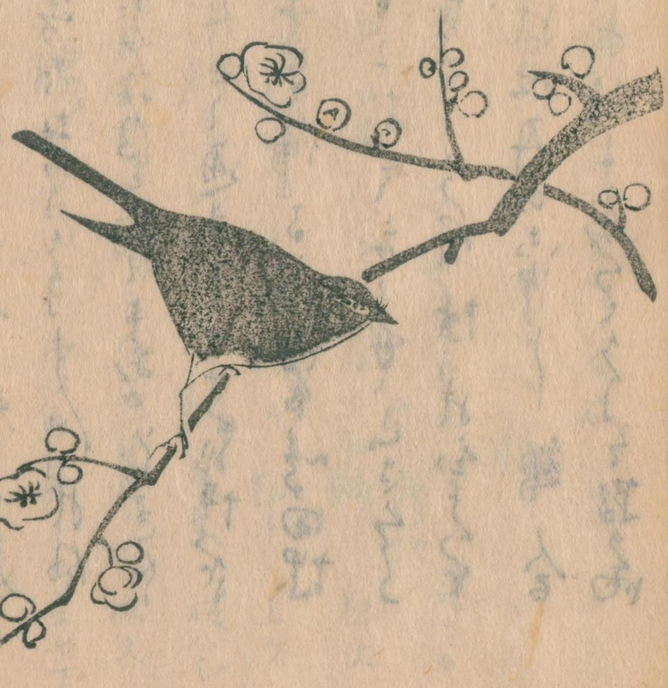
擇景
文松
式山
蝶く
素十
櫻菴
松風
子愼
翠雨
羅鳥
山旭



杉亭
双湖
一潤
暁樹
抱儀
玉芙
呉月
五十二
一磨


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用



判者　兎川

国立国会図書館　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169

ガラス使用

幸之　アヂサイゴ
貝子　女史
抱俄
蘭麝　佐生屑
山香　鴛鴦
赤雪
嶺松　チーブ太ニヤ
越水
椿斛　サルエ
抱俄
子將



翠羽
一朝
天和
弥枝
稚筐
烹舟
笠卜　上ケ
梅糸　下サ
静里　杉戸
三宵
風山　サクラ　下サ


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

田隴中の路の
日の雨のち
ものも松も
ふりそそぐ雨
窓をうつそ
そのかすめ
をうれしく
多き額の
立ち
清香や
多山や

信，
易邑
越中
可寧
陽或
梅吉
梅花
樗景
沼一
枝高
牛乳

暦書る人動しき
山茶花や
雨それの
綿の屋かけ

作舎西尾
吉原
秋文堂

素布
汝柳
竹人
嶺松
樗景
稲丸

おもしろおさよく
日のあるる
鈴のなる

十文舎
麻青
下や

千羽笛
甚文

杉風の
歳斗

本々
伝松川

栄二
易逸
子将

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

井の硎の砥ぐよふな小さ　本丁　大鯉
梓女の機古り　枯薄　サんエ　椿亭
筆先よ月の雪斗　冬籠　化成
探合一月ふ山雨きり　全　北儀
赤き実のもにまみれる　狩場のふもと月に消
雪もおる　鍬始の行衣の胸　女史　鶯渓
かくもおの雪ぐもものみ　全
秉るまゝのそろ〳〵に　春標　貞子
降雨々々春を都をもてきめ　全
かはらまの神ぜを祝ふ雑煮　冬光
　　一麿

山里もかるく田うち始のふ　今
営ともふ春ふと牛ふいそ　今
かむさ〳〵も松の花なり　秋田　鶏叉
学たいてさくえむ　松を植丁　三有
さるるや隣も同〳〵　多き　巴笑
学ぶさ〳〵てきぬ筆子葉へ　文虎
引抔ふ車人ふ〳〵　松古
ふいろれそ〳〵ふりふるさ　松山
のふをひのをてみ〳〵や　松仙　吟雪
まふ雪ふうかひ年ぬ日　一ふ

仙客の罪を赦さる二月ぞ仏大
さ一ト枝の梅六ツ七ツ 卍 交
けさ風の吹手つけ一山 鳥 交
山里よさをもてなすすゝ 幽 玉
野ら心ちして春色菜摘へ 李 風
さみせん要しまりうの山、 鴎 く
学の初春ちく〳〵 柳 条、 銀 子
薄いそゞ月のふ形なぬうち、 月 僊
ふところ湖水静をみる移ゆくサキ 玉 芙
京ふさき紀の川面を流ルゝ武コシ 千 玉

此あうれ杖こなうち法被の衣
稲妻乃くたく〳〵ゆ小土笠
涼しさや杖と勝手する行の風

巴水
宋我
應声

心太杖乃宗も人さりそう
蓮乃葉さおうこうを匂ろう

泰山
李朗

ほとゝぎす涼しさ旬の彩や
灯乃そゝみをぬるむ管弁

其月
錦之

籐行もり〳〵枝るそおす
招く乃ゐ袂を涼し川社
なを中月乃もの笑へきま

梅雄
雨苗
一朝

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

一輪をまづ折て供る牡丹哉　よもた
籬乃菊ふの薗へおちうり　旭多
その外ハ雨乃おまちみのうへ　梅月
夕ちお詫の本ふ色心　朱砂
暗乃羽の一言やもうえむるの月　其井
窪ちあつまる雀せ　一磨
松風の落かゝりうり秋嘯　古臼
せの中をすゝさ息よ牡丹ふる　平山
合歓乃香ふ渇のちくちくふゝる　宇孔
亦家ハ我ふ海ふ　負子

第よせてふき別ケ庵の笛　椿禽
併飛蒼やもみぢの借りゆり　朗亭更
脇師の簾をふせうみだれ　士衡
共おて狂名ちおれ乃そ　全
虫ゝ本ふ代乃古屋蓼かくり　其井
皆のうふふ衣袂の花　常笑
おりくうおを　素薗
略の来てあまぬるよ羽を洗ひ、　平山
森近くまりて拾ふ山乃芥行トシ　一柵
弾峰て枝を屋ト〻ふ庵のち　清松
丸山　士先

国立国会図書館　タイトル『男さうし』　請求記号 863-169
ガラス使用

多邑みの秋を小雀よ啼れそめて　公石
み一またちくるまの戸口出の声　子将
同よかけて夢七の宝一駒の声　抱儀
あさむいて咲さそふ一そのゆふ　〃
伸るそはー〳〵足少迄めらむ　〃
山垣乃ぬのうを冬の度り急　〃
名の本葛るやま檀乃毛葉哉　〃
秋乃宵のみそ落ちくるの月　小女鶯渓
萩吹や秋のさつまの茅の秋　〃
発てー〳〵まや石あてー菓又出　藻鯉



紫陽花のそれー〳〵さへ旭かな　元雄子
茅輪出て夏を脱の心かな　盛之
笑ふ曽乃悔るまてちるつゆ　芳薫
月乃出てうすー〳〵深や物の蔭　雅堂
麦飯を脇加減ー〳〵養ふ草　侭山
松風のまに〳〵ろ〳〵新松葉　可保留
雨去ると山本の気配哉　半乳
竹うるー〳〵月のえにたくむ之　李朗
庵丁乃切まほうへ梅よかる　其日
そろそろも新乃匂ひそ松柏　兎川


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169　ガラス使用

判者 宗淀

新酒舟よ
狩う夢ふ
おの気

稲妻よ雨雲よりも高のきぶ
雪降る成る社ろ秋乃空
疾部ろ新日洋ろ夜雪の雪
舟ろろ手月ろ雑炎よ親の情
猫よはるまさを注ぐ秋の雪
秋風平田面ろ野乃音
十六夜平心ろ治る松のふ
松風のおれ先より秋乃雨
新雪の拾ろ野乃面乃接婦ふ
人まよ拾ろてろろ萩の雪

下ナ

万林 苗里平 栃子 慎守 山長 三凡 古

黄

全 抱負子 儀子

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

稲妻に雲の絶るも栞こ
秋の蝶つまむて嬰を誂させ
風吹先の屏風ようつる芙蓉
秋乃蚊の大きく見ゆる夜
存るくや雨の雨よみしく小田
苅中こ音のかきむしのさほ
新米を夜乃神まで見ゆ
晴於乃寒て崩さぬ初
蓑笠を志し川月の頭
来なくやきくきへたる宿乃
我まに秋を引するふく

今　傳一
今　應拜
今　八角舟
如　梅舟
仙大　天ニ女
喜峰　抱儀
一麿

秋田うら雪の栗こ戻るも暗
嬰寒乃ちやそのふの風
笘菅や笠るもよたく
野たくも沖乃をすなの蛸
夕新よ馬の蓮くなのさる
松小ちきをふを古布くる
蜂なくや朽乃末赤き汗
海一さ我勝る曲屋る牡
ちる百をも仏新乃教
又風や吾乃星の末

今　梅舟
文　柳
花　に
麻　村
繋　く
為　已
如　瓢
朗　亭
魚　石

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

素舟　夕立乃くもかをそふる
三有　天月のそらふく峯
淳月　妹迄歩るく
勃碌　ちりとく日比の物
帰雅　蓮をうくる乃をかく
桃玄　夕そらやそよそよと
鳥山　松風の猿こたまる
清客　ものさき月乃出て
抱儀　被しては被の社哉
全　たゝまく乃あとしく

全　山形乃やせ癖つく
不玉　猿すまるゝ高つゝ
蔦和　柿干よる
小兎　傭ちひの支
丁奚　西風よ匂ひ
川　紬養よ
全　ゑもと里や
秀子　鳴も氣
全　暁の寒く
民　雨雫乃の

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

人の為ておのたゝ　あさよ脇の
郡一てのそをそ一里そる
風の露そもろそよ為ちる
小おう後月ま打こし風
捨ろ手ま　あんさひそ園の
鵜のあう打の為ろよ通ろう
志のもの後ろの月見ろ
世八一あき障やらくつろる
鶏頭の鬼角日和をこそろ
雨降てあろくまり　まろ
秋汐の中　後みろる高の

雙鯉　文泉　繪鴛
吟砂　玉石　上ユシマ
如瓢　如角　水戸
鴛渓　丸兎　下サ
負子　雨苗　下サ
男我尼　一麿　下サ
碧阿　子寅　佐吉田
一渓　啓美　サルエ
龍渓　椿秋

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

筆なくむさう 牡玲 行お湯 翠雨
夕雪をゆり合う 萩すき 紀陽 古臼
牡玲乃森そ麗さ 女羽 仙大 天ミ女
又おさま 癖もワなき 上毛大田 賢美
火乃降く 松そ見や 盛之
松風のたれそす秋の雨 女史 負る
蓮乃実乃落てもくむ雄ぶ 抱儀
名月の雫をさきて人通り 十リタ 汶水
秋さまくもみちの中乃 武ノ 如帆
きのふも似る似也秋の夕 イタバシ 項耕

玉心我とおこの道くもろく
教る乃ゑる森を雨の記り
まり月のらくつる口より 松寿る 上田
つす秋そのもれ移そ 吉里
うま 伊吹えて着る 拾ず 上田
庵下の如道味ら入物 其
なとまた帰教雄乃美の中 乃唐中
谷越ろいむまへや杜 上毛
蓑隆の人をえくえ 下サ女る
仲の雫典もそれ多 一

下サ羊ヤ 月摸
越左唐 幸之
可保田
文来
李朗
其月
梅雄
素十
雨苗
今

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

秋色〳〵第子さひしき門柳　フキヤ　子規
笠の竹伸る見ゆる麓や秋の雨　よしき
大雨の名月なるべきの月　鈴中　森栄
心なくもあらま蓮のむら立つ　兎丸
山の井の井の字も霜を結ぶ哉　水戸　新橋文懐　篆
名月雨中　雨おくり給もうし、　下ヤ　崔歩
涼しさやほのぼの明る月朝顔　シマ丸　宋一子
乃川ぞと染るの立田かな　五十二
立そめや養そのまゝの隅田川、　栄砂
子規のさゝく流る卅日　庄内　豪郎

書国うち書きいるもおかしき　下サシマ田　梅舟
鯛掛くる柚子ある社人の家　イシブスミヤ　元民
行くらむと下むらくよりく　扇カの山　文柳
雨乃ふまゝ消し行まゝなみかな　仙大
ふけるまゝ月くまなくなる秋雨や　珠林更　幽雨
きく〳〵ちを知る夜ぶかうもの松、　薫朗
月乃ふくらくへつゝ木枯のまて　下井佐倉　雅堂
国をうち更乃中乃夜もすがら　スキヤハシ　貴琴
鶏鳴や夜荘乃門も秋山　ヨコアミ　為巳
竹うえゝ菴の秋風を定とす　美容シマ　糀松

朗亭　今日をよつまの朝の明ぼの
翠羽　たゞ菊中楊妃をもちらす女中客
素舟　ゐるの月見すて汝や雪のふる　佐久ラ
今　　錦乃青衣日傘乃美む枝ふさ
賊三封　うさの秋をそのかへ昌〳〵百合のさく　目白
可耕有　夏痩乃あるりもうさそ秋やまし　ミトリ丁
羅仏井　蓼ちる中乃風の尺へさく身軽　イタハシ
　　牌まつ幼ちやる乃そまし山　上モ玉村
　　蓬萊乃山人ちゝくちゆをも　、上ノミヤ
　　蚊の中こそゆるちく男うめる　、上ノミ

浮月　予自雨ふ侘むる雨ハ蚤蝿厲之
梅海　面稗の枝よあるを稗納豆
文柳　まる二日ニそ雨ふる事也
翠雨　八梅やつゝち枝の名ゑひ
扉舟　ま門出ふ風色ゐき田植ゑ
一青　下におのゐ苗やのゆのゐ
玉珊　かゝむ〳〵のまへ入延ゑゑ
松月　酒の泡吹とる風や父病
乱山　冠のゐ祝てゑるしまさ
五十二　書やま動引抜やみ月
梅月　也話しさのかゆなる事也

二つれまい簑かうらまて
まこめ申瞼つき今んそ
すゝーす申母と中すゝ波
涼ゝす申ふろう吹扇ゝ
雪の梅ゝ衣もあゝ光行
得人ゝ申る伸て仕ゝ
ちりすゝる申湯すゝてもゝ
雨を春ゝ市もふくゝて降
三衣ちゃのそゝ降ゝ寒うあ
倪ゞまゝそゝ露も来すや
第牛のうゝろまいるゝ日ゞ

美人　貴
膏車　貴
蟬衫　貴
桂巷　貴
埜水　貴
蒜月　貴
陽炎　貴
梅高　貴
今田美　貴
波水　貴

梨地蒔の茶碗　抱儀
鈴子さん間き高飛ー雪ゝ雀ゝ　仝
春れ雨すゝろの薄ゝ中ゝすゝし　仝
お梅れ薫ゝまゝ降ゝ心ゝ句ゞ　貞子
第梅あ去年れ伐ゝ抗有泥に　寫俟
いゝ度ゝ度ゝゝまゝ雲ゞ　仝
たれもゝう事そゝ歌ゝ雲ゞ　馬紅
梅乃葉ゝ付もゝ降ゝ蒜の如　箕凡
須ヶ寺ハもゝう晴ゝ絵月　孤松
阿弥陀ゝ茄子床ゝ降ゝ　五凡
恵猫れ寄ハ根ゞ植の　兎丸
蝶ゝ半ゝ柳れ糸ゝ

カウモ町
常夜燈
スカモ

山越れおく後年始やれ桃れ花　喜栄
同よ見へぬ風吹なり枯野原　秩父
酢ひしれ青こよ秋ある寒ぶ　雪羽
仲等おて掃除うに雨ぐう　越こうう　朗亭
月い香れ〆へ梅の花　ヒタチ　宇弘
梅様只ちくまい休しきに　松凡
おれ松やそちもあ日彩シナノ　賢美
炭ゐて砂れ休し乾儀ら礼　福井十　千代女
振やれ庵丁きくやさ九ぐ鯛　喜長
山吹ハ蝶れ愛見るま〻くう　抱儀
切凡ゆよ仇夜れ中山ま越む　土ウラ　応声
　　元明

棒ももれせてさうてや蝶れ愛　仙大
凡中切てお見れ松よかつ　学芸会
落線ていくおお蕎そ井景　越・シラ
皂角子もかれめうすくま　常小田
ゆく毒そひくやゆめの昭兄　立川
害梅中雪を歌く連額　舟尾
麻ぐ麻角まりてゐやゝ井　秩父大宮
垣根ぐう月いかれて梅かる　常府中
椰れ鳥の水見てすくむ余さふ　廿之
山白ふうぐ松たつぐく本芽丸　バクロ丁
居り帆ま降路かくめるはあぐ　兎川

亀十
栖至
杉亭
壷仙
字月
素舟
嶺松
梅雄
車三
花山
兎川

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用

夜や暗隅子ども松一木 小川町 連我子
初ゆあをるる振もちんぼの書 盛之
よるおもひを鳥も流さぬ書のあ 汶柳
青柿や硝子戸ても拵ぬ小門哉 廿七工 椿齋
花咲て細くかそうな枝 フキヤ丁 子順
田れもぬるむ中を踏 下ヤ 閑一子
阪や高田も喧嘩 イセ 松愷
梅ふて着るもも狭く 子將
鳴むても黄はむ 芍蘭
ゆるさまて塚遠よし 二葉
誉も帰伸たる田毛の 下廿佐倉 稚篁

蒸の戸や傍よ似て似ぬくの滝 上ケ 得一
霧や日の志ゝ霧吹てゐし、 得三
淋しさのふ影よなりぬ 桃逕
月うみを引通るちを 桂雪
一ふ茶を切てもふ 里松
及るん帰けるむ
白数を霧よもひて
むとそをおくの
仮るも白きを淋ふ 鮎風
初汐や風す結き 玉誠
柳ちるちるも来う廿日 然香 五十二

村端の地蔵堂や　かくちやま　六ノ

もみぢまるんくる秋の峠　七ノ

鈴鳥も紀伊路をさそふ法師かな　武君　千玉

名所と月のせうしや外、　秀志

杖もちやそのおもかげの橋ナ　雀羽

朝汐やその上弦の　ハセナ　其笑

下京や皆あさましの世ちりく　武玉川　匪石

涼しさを吹ちらして松のあらし　スカモ　五風

松風とちりてゐるくさまを　ナヤ　仏長

簀のもれ水にふさきくり　ナヲサカラ　水鳥

笑ひめてちくぬはちす哉のも　不玉

去ぬるよの心地せうちる桜　下サ京西　百合牙

陽もうのもれよしてゐるくあの田外　壱川　浮月

鈴仮乃ふそくなをよきまくり　千ブ　梅吉

永き日を老き祝部らえぼし　上ケ玉村　里松

桜咲や門田のもまくまの、　雁仏

角芦のさしけるまのそや、　子鳴

あるくよはちそくて蛍の明りく　太田　賢美

入るうめよそくて住吉まで　庄内　素郊

山吹や令松丸ゝ乃参　上ケ　得一

連歌よくうくれぬる名ゝ称の句、　桃岳

ぬるく迄聞るもきく花の雨、　板井　桃村

なる那一枚の先よりするの月　仙大　二交

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

佐保山の　匂ふまさきて　コシ
路よくも　松よ咲くも　上タ牛
雄おとの　多恨よ　加タ
冬の　澄とふ　佐波
春の　唐風　秩父
叙よも　木よ　上タ牛
朝起の　たのこまや　杜字　下サ
窮戸を　押くも　杜よ　秩父
傍廂の　新切を　唐もも　市兵衛
樹の香ぬさつく　欲半　海辺
指よ　風の　通計り　上タ牛

石楠
七友
冊太雪
風山
梅吉
百合丸
梅垂
雪渓
蓼里
琴砧
此さ見

相の花　天辺翔　多
愛鉄を　指さま　師
和らか　月う　上ケ
あの帰　何　上ケ
よ乙女の　笠旨　一説
栗の　雨も　仙大
苔むす　宗祇の　上ケ
指をの　舞よ　メシュ
おもふ　梅の　上タツナ
時鳥　歌の　下サナリメ
一室　腐ち　下サナリメ

素多
梅多
撃羽
桃源
梅井
卍文
素十
懐舟
玉村
玉柳
汶水

川さゝめ中なくめる　鶯谷　三八
うらゝの霞風くいそ　ヒタチ　勝保
春ちくらゝの書て居る　押至
初松急一坐の夢となりぬ　板ハシ　砌新
春寒をものおもふ人ハうむ　チンフ　田子
記る新や誌を筆始　勢カノ山ハシ　雨碑
行くる年も誰一大事　拖儀
かわらぬ四条と会る雪の月　今
松山のあけきるる也　負子
山をまき冊こる乃　雪候
月のえ衣毎を蔭と　應聲

森て居ても年をくる庵き宮ゐ　無谷　五十二
曽根の郷も他ら鶯も　梅月
硯水も心地雨さ　上ノ
新の木のうちにあるる事　玉露
松風も客を待つ炉に　秋成
鳥の移る枝を雪川　滝白
杉心つのそる迄きり　渥山
寒仏や線幾すちのあるく　菟葉
山をや松明蔭き寿の　和言
移住や人くるを先にみそさゝる　山島
住の誠に山を要さむ　庵カ

月雪のけしきを各〻句を綴りて
き移るのひゝきに冰ゝ
山寺の鴈を聞ゝきゝ
加賀鏡に船夷の島ゝの有て
射そつ一の矢を拾ひゝ
名園のあるじや蒲團の長〻
き〻霜の朝ぼらけ
月更る湯屋の流せ聞甲斐
竹林に似て仰ぐ顔や
ゝゝは雪鴨立沖の雪ゝ

陸奥 北女
翠羽
荘岳
稲丸
十羽留
子持
鶯渓 小女
貞子 女史



月
光月 ハマヂ
好山 名田伏
兎丸
完哉
豪和
鶯渓
翠羽
勇雪 上ケ谷侍
抱儀


国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

巴水
馬紅
參光
一麿
幸山
三八
爲朝
琴路
兎月
松杜
三有

士光
亀十
玲風
超聲
宇弘
弁記
浮月
小人
琴迪（女）
天々（女）
鬼川



国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用

花よ彷て詠吟ま
松風の音よ敏な
まゝ柳よまゝ降
年くも月鏡へ
乳をあまれ
ものかと紀樹振紙様のきし
〳〵ま〳〵霧翌をけくられ暑
月数経く過ぐる松乃芽の姫
器あ小痛てなりて春の
茅中ま古く見ゆるや
山吹ま蝶の姿見る木あ

公石
翠羽
帳川
子将
暖多
苑蘭
負子
鶯渓
立
涯山
應聲

業胡ある人を
風又ゆるゝま伸
下茎ま管業あ
乃てこの
多雨れまゝ日
名の三の
七中よ
計よまるあ
月ま作
桂ま古茅よ

佐賀市
杉ア
燈子
静里
本丁
財多
大魁
和言
山多
枝堂
上毛下田沢
素十
武井賀
一朝

十二ヶ月花鳥の譜

年たちかへる春の乃こゝの乃ちの柳の
枝乃うゐしらへ乃ことを学ひ面もちを
見そめ梅すくゝをしの乃ちの新乃
春まち時乃ふるまひおとこかの松
ふかゝる山茶花や寒さのきはまりて雪をさそふ

立川　保月
秩父　腰梅
今　梅雪
イタコ　漆人
汶梅
信手出　兎川
似雪
二左門　杜杜
上毛太田　守山
怒谷　玉笑
五十二

添て枕辺を去ることあまた
して千年を経たる古狸あらん
(さくとぢつ)
替りのまかちよ宝(さくとぢつ)年のさま
まよ咲の梅乃古ほろを
よ水をの梅すもとも
ま市ぬるやうとさんのふやし
くよおまかゆれ
月と日を経ることすて年ぬね

伊丸

の誹謗ハ智恵
滑稽をまとふ
そして平屋の真眼
ありまして寿を
起しまして事
を失ふ敢て邪
夢村暁基閑更
ありまして各士
ありまして真実

863
169

14247

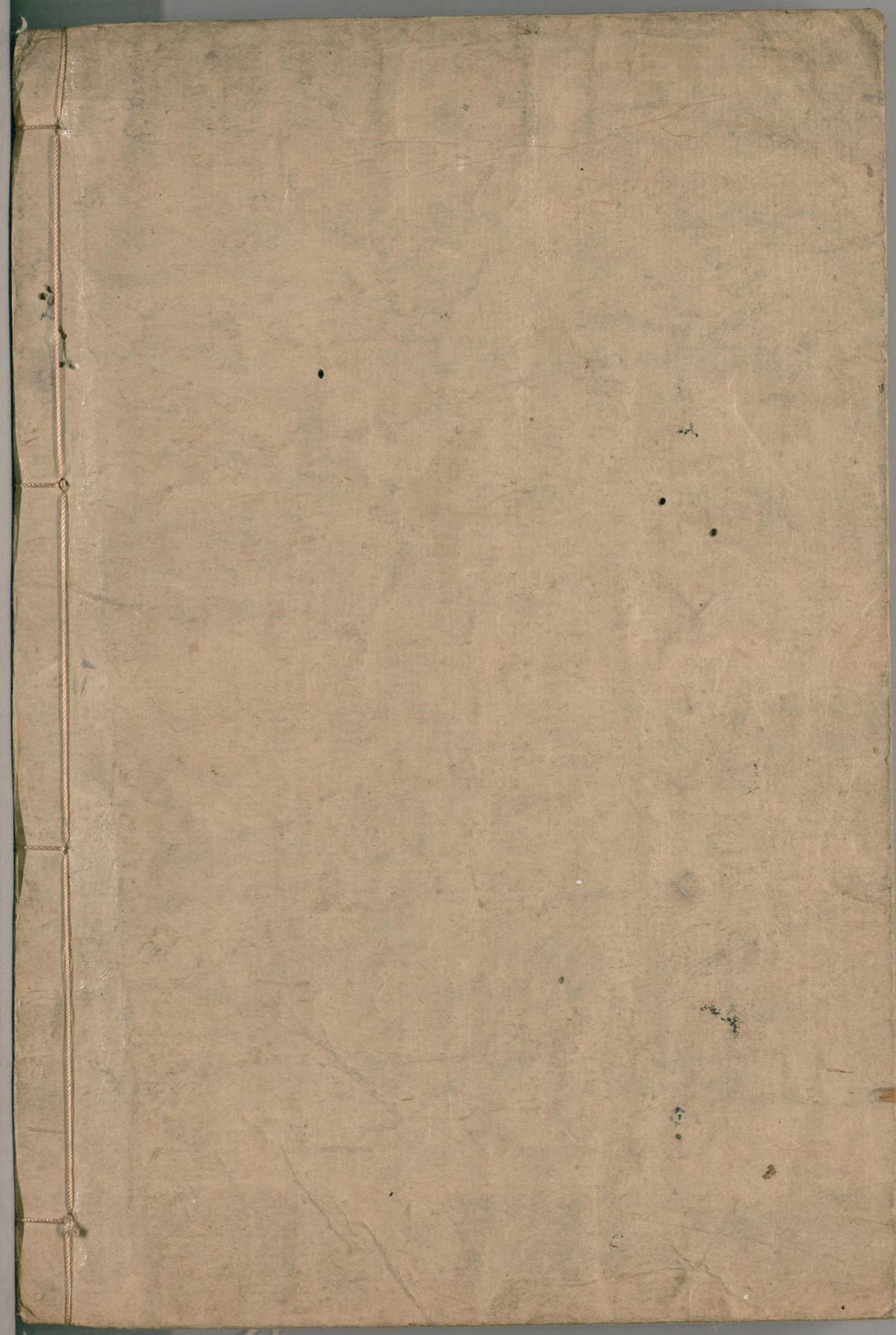
富士川院社大高之志を継
神山と号し学を好む
招きまゐり集る男女
多くは俳諧にて詠ず
當時の明事師あり
あとをしたひ其徳を
慕ふ

甲申臘月

行年六十有七
釋夢梅誌

吉大正文庫

国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『男さうし』 請求記号 863-169

ガラス使用